

## 第3回 鎌倉海岸七里ガ浜地区侵食対策協議会

### ◇ 開催概要

日時：令和5年9月25日 14:00～15:40

場所：鎌倉市消防本部 鎌倉消防署 3階講堂

出席者：委員17名、事務局15名、傍聴者4名（委員随行者含む）

### 議事概要

#### 1. 開会

#### 2. 前回（令和4年度予算）に実施した試験養浜後の海浜状況（資料1）

- ・ 令和5年4月に約2,000m<sup>3</sup>の養浜を実施した。養浜土砂は、第2回協議会時に説明した粒径の相模川堆積砂を利用したが、施工時のサンプリング試料では説明時より粒径が小さくなり、大きめの石も含まれていた。
- ・ 養浜盛土は、主に令和5年6月の波で約300から400m<sup>3</sup>削られた。残る養浜盛土の天端及び法面では植生の繁茂が確認された。
- ・ 一方、養浜盛土から東側の岩盤露出部は広がった状況となった。

#### 3. 次回（令和5年度予算）の試験養浜方法（案）（資料2）

- ・ 波浪により流出しやすくするため養浜盛土の高さ（令和5年4月の高さはT.P.+6.3m）を約2m下げ、養浜量は約2,000m<sup>3</sup>とし、実施時期は令和6年1月頃から3月頃を予定。
- ・ 養浜位置は、海岸性植物が存在する位置は避けるとともに、前回に実施した養浜盛土とは別にモニタリングを行うため、既存の養浜盛土から約50m離して、露岩域と砂浜が連続する範囲に養浜を実施する予定。

#### 4. 今後のスケジュール（資料3）

- ・ 秋に養浜材の選定を行い、必要に応じて、養浜材採取予定箇所の見学を行う。
- ・ 前回及び次回予定の試験養浜の漂砂シミュレーションや、現地における環境調査、測量などにより、適時海浜の状況を確認して行く。
- ・ 令和6年3月上旬に協議会を開催し、養浜の効果評価を行う。

● 委員意見概要

主な委員意見を整理した。(●意見、⇒意見に対する回答など)

- 現地を確認したところ、盛土法面が急な斜面になっており、水が流れる道も出来ている。雨が降った際に部分的に盛土が削られ、みず道になっているのではないかと感じました。【伊澤（中原委員代理）】
- 養浜盛土の勾配が急で、危険なので、少し勾配を緩くして頂いて、例えば子供たちが登ったり降りたりして遊べるような、そういうスペースとして解放していただければもうちょっと自然に崩れていくのかなと思いました。【奥田委員】
- 子供たちが登れるような状態にというお話ですが、県が試験的に砂を盛るとのことから、ここを登れてしまうとまずいという考え方が地元には浸透されていると思います。【伊澤（中原委員代理）】
  - ⇒ もう少し勾配を緩くすると登れなくはない。そういう意味で養浜の仕方を工夫する余地はある。試験的な観点からすると、人が立ち入らずに波の作用だけで盛土が崩れた方が養浜による砂浜の回復予測としては、より良いデータとなる。海岸は公共用地で自由使用の原則もあるので、養浜盛土に立入を禁止するかを議論しておく必要がある。【宇多会長】
  - ⇒ 試験的な養浜盛土は高さがあるので、安全上の観点から盛土で遊んでもらうことは難しいことから、立入り禁止措置もしくは周知用の看板の設置を行っていく。【事務局】
  - ⇒ 前回の養浜盛土では、崩れたのが高さ約2mなので、2m以下の盛土にすれば比較的早く盛土が崩され、その砂により浜が広がって良いという考えがあるが、一方では盛土を行ったのでしばらくはそのまま残ってもらいたいという考え方もあり、その点ではまだコンセンサスが全然ないため、今後どうやって砂浜を回復させていくかを考える必要がある。【宇多会長】
- 盛土について、雨が少なく、草が生えたから崩れにくかったと思います。ただ、西風の季節になると飛砂が激しくなるので、草は生やしておいていいかと思っています。【奥田委員】
  - ⇒ 飛砂については、西風が吹くので対策を考えていかないといけない。【宇多会長】
- 一回目の会議のときに、なくなった砂浜はどこに行ったのかという、大きな命題があったのですが、試験盛土の流出では、その点の推測はされたのでしょうか。【福嶋（村谷委員代理）】
  - ⇒ 確定的なことはまだわからない。養浜土砂の約400m<sup>3</sup>が何処かへ流れ、試験的に養浜した箇所から東側では砂がなくなり露岩域が広がった。現地計測と推測を組み合わせながらコンピュータでシミュレーションして、一歩ずつ進めて行く。【宇多会長】

- 次回の養浜方法の案を見ると、より稲村ガ崎側で養浜を積極的に行うということですが、国道134号も守っていくということなら、さらに東の、海が接しているところに手をつけていただきたいと思います。【池田委員】
  - ⇒ 国道134号では擁壁整備が進められており、その周辺で養浜を行うことは難しいため、今回はその周辺を避けて、前回の養浜箇所からもう少し東側に広げるといった案になっているが、擁壁整備が終わったあとに養浜材を入れることも検討する必要がある。なお、今回の養浜方法の案では、岩盤と砂浜にまたがって養浜盛土を行う予定としているが、この岩盤は海に向かって多くの溝があり、その溝に沿って水が流れると岩盤の上の砂はたちどころに無くなってしまう。場所によって、高さや溝の状況など条件が異なる岩盤の上に砂を安定して堆積させる方法について今回実施する試験養浜の結果をもとにしっかりと考えていかなければならない。【宇多会長】
  - ⇒ 岩盤と砂浜で養浜の違いを見ることは非常に良いと思うが、岩盤上に地下水が流れるということであれば、人工的に作った盛土の下に見えない空洞ができて陥没事故につながる恐れがあるので、養浜箇所を立入禁止にするかしないかという議論もあったが、岩盤上に養浜した場合は、天端で陥没が起きていないかということもモニタリングする必要がある。【石川副会長】
  
- 養浜の際に海岸性植物を埋めてしまってもよいものか。【宇多会長】
  - ⇒ 海岸性植物か陸上性の植物に関わらず、植物は飛砂を止め、砂の固定化してくれるので、植物の力を借りながら砂浜が回復するのを待つということが良い。養浜箇所に陸上性の植物があった場合は、ある程度はその上に養浜盛土をしても仕方がないが、海岸性植物については活着しやすい場所に置いておけば自然と増えて、将来的には海岸性植物の種を市民参加で採取して砂浜に戻すという形で地域にあった植生に戻していくということもできる。【清野委員】

以上